

〈トラブル〉再考：女性による女性性の^{パフォーマンス}遂行と攪乱

井芹真紀子

1 はじめに

本論文では、女性による女性性の遂行／パフォーマンス female-female impersonation の可能性を考察するために、ジェンダーのパフォーマティヴィティの、必ずしもジェンダー交錯的ではない形のあり方を、フェム・レズビアン、特にハイフェムのジェンダー同一化における「違和感」に見出していき、ということを試みる。ハイフェム、あるいはフェムのナラティブの読解を通して、ジェンダー・パフォーマンスが切り拓く、規範的な女性性を変容させる契機、〈トラブル〉の可能性を考察する。

2 ジェンダー・パフォーマティヴィティと視覚性

2.1 パフォーマンスとパフォーマティヴィティ

ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』(Butler, 1990/1999)以降、ジェンダーのパフォーマティヴィティの理論は90年代のクィア理論およびフェミニズム理論にとって、最も影響力を持つ概念の一つとなった。バトラーの議論は、言説に先立つものとしての身体(セックス)や、首尾一貫したジェンダー・アイデンティティといった概念が、いかに異性愛規範の下で「自然な」ものとして構築されるかを暴きだした(Butler, 1990/1999)。ジェンダーは規範の反復的な引用とその沈殿として、「行為」を通じてパフォーマンスに構築されるといふバトラーの理論は、J. L. オースティンの発話行為論からその着想を得たものであるが、彼女がドラッグ・パフォーマンスの例を用いたこともあって、パフォーマティヴィティとパフォーマンスの間にしばしば混同が生じてきた。バトラーは、『ジェンダー・トラブル』において彼女自身がドラッグをパフォーマティヴィティの例として取り上げたことで、ジェンダーを服のように交換可能、あるいは選択可能なものとして捉えるような誤解が生じたことに関して、「仮にドラッグがパフォーマンスであるということは、全てのパフォーマティヴィティがドラッグとして理解されるべきであるという意味ではない。...私はジェンダーが服のようであるとか、服が女性を作り出すと考えたことは一度もない。」(Butler, 1993, p. 231)とはっきりと述べている。バトラーにとってのジェンダー・パフォーマティヴィティとは、選択的な結果として現れるのではなく、むしろ生存可能な主体としての資格を得、留まり続けるための、規範の強制的な引用にある(Butler, 1993, p. 232)。つまり、ジェンダー・パフォーマティヴィティとは、自由意志を持つ行為者が選択的に決定できるものではなく、むしろ主体の編成に先行し、行為者の存在あるいは生存可能性を条件づけるものとして作用するのである。そのような意味にお

いて、バトラーははっきりと、「パフォーマティヴィティをパフォーマンスに還元することは間違いである。」(Butler, 1993, p. 234) と指摘している。

しかしパフォーマンスとパフォーマティヴィティは区別されるものであるとバトラーは断言する一方で、演劇性 *theatricality* やパフォーマンスがパフォーマティヴであるということについても言及もしている。プロッサーは、バトラーが『ジェンダー・トラブル』においてトランスジェンダーの主体を「うっかり」例として用いたことによって、ジェンダーのパフォーマティヴィティを「ジェンダーの演劇性」として捉えるような読みを可能にしたことについて言及し、そのような誤解に対してバトラーがその後パフォーマティヴィティと演劇性の違いを *Bodies that matter* において主張した、と位置づけている (Prosser, 1998, p. 28)。しかし、パフォーマティヴィティとパフォーマンスの違いを明確に主張した論文 “Critically Queer” において、「ジェンダーの演劇性」について言及した箇所では、「演劇性」は「完全に意図的ではないもの」(Butler, 1993, p. 282) であり、自己提示や自己形成とは混同されてはいけないもの (Butler, 1993, p. 232) として位置づけられている。つまり、バトラーにとって演劇性やパフォーマンスはパフォーマティヴィティと完全に区別されるべきものであるというよりは、むしろ規範的な／同性愛嫌悪的な様々な呼びかけを抵抗のための言説的基盤として受け入れ、引用することで、同性愛嫌悪的な「法」を摘発するという、「パフォーマティヴのクィアな領有」(Butler, 1993, p. 232) を可能にするものであると考えられるのである。特に『ジェンダー・トラブル』の段階においては、ジェンダー・パフォーマンスがいかにジェンダーのパフォーマティヴィティを演じる (Butler, 1990/1999, p. 244) かにあつての描写があり、ジェンダーのパフォーマンスは「強制的な制度のなかで ^{サブバル} 存続していくための戦略」(Butler, 1990/1999, p. 245) として位置づけられている。また、清水晶子は “Imitation and Gender Insubordination” を「バトラーの著述の中でもとりわけパフォーマンスとパフォーマティヴとの切り離しがたさが目立つもの」(清水, 2006, p. 174) として評価しており、その中でバトラーは明確に「パフォーマンスはパフォーマティヴである」と述べている (Butler, 1991, p. 24)。ジェンダーとは先行する主体が決定するパフォーマンスではなく、むしろまさにその主体を構成するものであると同時に、主体が生存可能なものとして留まり続けるためにはある種のジェンダーの模倣 (*mime*) がつまり規範の引用を通じた何らかのパフォーマンスが一反復され続けなくてはならない (Butler, 1991, p. 24) ことから、パフォーマティヴィティとパフォーマンスを完全に分離することは不可能なように思われる。

本論文においては、パフォーマティヴィティを、その行為の背後に統一的で自由な主体を想定しないものであり、その引用は主体の自由な選択によるものではなく、むしろ選択不可能な状況でヘゲモニックな形態の反復を強制されるようなものである (Butler, 1993, p. 124)。そ

れと同時に、バトラー自身も指摘しているように、まさにそのような強制的な引用の反復にある種の「承認」としての、主体の—そして〈わたし〉の—生存可能性がかけられた (Butler, 2004, p. 207) パフォーマンスを不可避免的に含むものとして考えたい。

2.2 ジェンダー交錯的な形象の攪乱性と、その問題点

バトラーのジェンダー・パフォーマティヴィティの理論におけるパフォーマンス性は、ジュディス・ハルバーシュタムによって引き継がれ、男性性 *masculinity* の構築性を明らかにするものとして展開された。ジェンダー・パフォーマンスの身体化には異なった歴史性および概念があると主張するハルバーシュタムは、バトラーの「すべてのジェンダーはパフォーマティヴである」という主張が、実際には主にゲイ男性の文化 (キャンプ) に偏っていると指摘し、キャンプの具現化するものとは違う形でのジェンダー・パフォーマンスの特徴をドラァグ・キング・パフォーマンスやブッチ・レズビアン¹の身体性に注目することで示した (Halberstam, 1998)。パフォーマティヴィティにおける女性性と男性性の現れ方の違いを指摘したハルバーシュタムは、「自然」なものとして、ノン・パフォーマティヴだとされてきた白人男性のジェンダーもまたパフォーマティヴであること、そして男性性が「男性であること」と同義ではないことを明らかにするものとして、ドラァグ・キングのジェンダー・パフォーマンスに、男性性のオルタナティブな可能性を見いだした。

バトラーおよびハルバーシュタムによるドラァグ・パフォーマンスの再評価は、ジェンダー・パフォーマティヴィティ／パフォーマンスの政治的可能性を拡げた一方で、ジェンダー交錯的な形象の賞賛というクィア理論における一つの傾向を示すものとなったともいえるだろう。ハルバーシュタムが男性の扮装 *male impersonation* と女性の扮装 *female impersonation* の間に存在する非対称性を指摘し、ジェンダー・パフォーマンスにおける身体化に性的差異の導入を行ったことは、確かにジェンダー・パフォーマティヴィティの議論における一つの大きな理論的進展であったといえるだろう。女性／男性の身体化がそれぞれ異なった歴史性と文化的背景を持つために、ジェンダー・パフォーマティヴィティが「異なった形で」現れてくるような作用を明らかにしたという点において、ハルバーシュタムの分析は非常に示唆的である。しかしながら、主にブッチ・レズビアンや FtM トランスジェンダー、ドラァグ・キングといった形象を分析するハルバーシュタムの論考においては、ジェンダー交錯的な形象、それもしくは可視的にジェンダー交錯的であるような形象に「すべてのジェンダーと性的指向の構築性」を示す攪乱性が見いだされているという点において、バトラーと同じ傾向を持つ。「女性の男性性 *female masculinity*」を「偽物」や「失敗」ではない形で思考するというハルバーシュ

タムの論考は、非常に重要でかつ必要不可欠な理論的進展であると同時に、トランス的身体の称揚という 90 年代のクィア理論における一つの傾向をなぞることとなった。

ジェンダー交錯という形式で達成されるような可視性への要請は、特にトランスセクシュアルやフェムの存在自体を不可視化し、その不可視性が「非存在」を意味するとき、それは彼女ら、彼らの「生存可能性」を脅かす危険すら持ち得る。トランス理論の理論家ジェイ・プロッサーは、『ジェンダー・トラブル』においてジェンダーのパフォーマティヴィティを説明する際に、パトラーはあくまでも異性愛のストレートなジェンダーを基点としており、「すべてのジェンダーのパフォーマティヴィティを明らかにする」クィアなトランスジェンダーという^{フィギュア}形象が、「自然化のヴェールによって見えなくされているストレートなジェンダー」のパフォーマティヴィティを示し、脱自然化させるために消費されていると批判し (Prosser, 1998, p. 31)、パフォーマティヴィティの理論では取りこぼされてしまうトランスセクシュアルの「あること being」への欲望を指摘した。

またビディー・マーティンは反基盤主義的な理論において、クィアなセクシュアリティが形態的で、パフォーマティヴな戯れとして賞賛される際に、それはフェミニズムや女性の身体が固定的で、強制的であるというような見方に拠っている場合があるとして、そのような見方においてミソジニーの作用が見えなくされることを指摘した (Martin, 1998, p.11)。マーティンが危惧するのは、セクシュアリティが可動的で男性性を帯びた、規範にたいして対抗的なものとして位置づけられる一方で、ジェンダーが固定性や女性の身体への従属というネガティヴな用語として考えられ、身体（とりわけ女性性と結びつけられた身体）からの離脱やジェンダー交錯の形態が達成すべきゴールとして設定されることである。ジェンダー交錯的な同一化という可視的な差異の分析によって規範が規範であるということを暴きだす、クィア理論および政治におけるジェンダー横断の強調は、一方で、フェムや女性性を不可視のもの、あるいは固定的なものとして想定してしまう危険性をはらんでいるのだ (Martin, 1998, pp. 13-14)。

プロッサーが指摘するように、ジェンダー・パフォーマティヴィティ、つまりジェンダーの行為遂行性の攪乱性に対する可視性の要請が、ジェンダー・コンスタティヴィティ（ジェンダーの陳述性／事実確認性）を「クィア性の限界」(Prosser, 1998, p. 45)として、トランスセクシュアルの身体に付与する傾向、あるいは、マーティンが危惧するように、可動的でパフォーマティヴなクィア性（あるいはセクシュアリティ）に対して、女性性が束縛され、固定的な身体として距離をおくべきものとして女性性の身体が想定される、という傾向がクィア理論にあるのだとしたら、ジェンダー横断的ではないかたちの〈トラブル〉を思考することはどのように可能となるのだろうか。このような理論的背景に立って、ハイフェム・レズビアンジェンダー・パフォーマンスにおける〈トラブル〉の可能性を検証する。

2.3 フェムの攪乱性：「女性性の過剰」、あるいは「不可視のセクシュアリティ」

ジェンダー交錯的な形象に注目が集まる一方で、外見的にはストレート女性との違いがわからないことから、批判の対象、あるいは不可視の存在となりがちであったフェム・レズビアン¹の政治的可能性を評価する理論的試みもなされてきた。1970 年代初頭フェミニズム運動の興隆とともに、フェミニズムとレズビアニズムの典型的な統合の結果として、ブッチ-フェム的なふるまい、ドレスコード、ライフスタイルは、異性愛的な、男／女、あるいは夫／妻なぞるものであるとして批判・排除の対象となり、植民地的な伝道計画ともいえるようなやり方で、「間違った服を着た」レズビアンはレズビアン・フェミニストへと変えられていった。スー＝エレン・ケースは、そのような歴史を指摘した上で、排除・拒絶されてきたブッチ-フェム役割における、生物学的決定論や本質主義、あるいは異性愛主義規範に対する攪乱的なエイジェンシーの可能性とその可視化を模索した理論家の一人である (Case, 1989/2009)。ブッチ-フェムという役割演技が、支配的な異性愛文化への同一化として捉えられることの多かった当時、フェムは「レズビアンにブッチの役割を強いることによって生得的なレズビアンを損傷するような墮落した異性愛女性」(Case, 1989/2009, p. 34)であり、女性を男性化させることで、女性同士の友情関係を性的なものにしてしまうという理由から（しばしば白人中産階級の）フェミニストたちに否定されがちであった。

それに対してケースは、ブッチ-フェム役割における「キャンプの機能」(Case, 1989/2009, p. 36)を読み込むことによって、レズビアン²のブッチ-フェムの伝統を、異性愛規範の模倣や同化から切り離す。舞台装置としてのキャンプは「本物／真実」対「偽物／虚偽」の差異を解体するものであり (Case, 1989/2009, p. 36)、自己決定に基づいて行われるそのパフォーマンスは、ジェンダー・イデオロギーの内部と外部に同時に存在するような「フェミニスト主体」として考えられるものであるとケースは主張する (Case, 1989/2009, p. 32)。ケースはリヴィエールが「仮装としての女らしさ “Womanliness as a Masquerade”」において主張した、異性愛女性が父親のペニスの所有を公然と主張しないのに対して、レズビアン女性はその所有を公然とみせびらかすという差異に依拠しながら、フェムによって演じられる「補償としての女らしさの仮装」とは、リヴィエールが理論化したもの（異性愛女性の仮装）とは異なり、男性のまなざし male gaze に対してではなく「ブッチに対して演じられるもの」(Case, 1989/2009, p. 40)であると指摘する。ケースによれば、自らを女性性の過剰として演出するフェムの仮装とは、異性愛主義的な社会において女性が要求されているような「受動的な対象」ではなく、むしろ意図的に自らを「みせびらかす」(Case, 1989/2009, p. 42)ものであるという点において決定的に異なるような、皮肉的なキャンプ・パフォーマンスであるのだ。

一方で、「ストレート」の女性としてパスしてしまうジェンダー交錯的な可視性を持たないフェムのセクシュアリティの不可視性にこそ、フェムの攪乱性を見いだす試みもなされている。クィア理論におけるジェンダー交錯モデルの賞賛とフェムの不可視化を指摘したマーティンは、同じ論文において、「フェムが〔ストレートな女性として〕パスできるというまさにその事実こそが、ゲイ/ストレートという境界の透過性によって異性愛を脱・自然化させる可能性を含んでいる」(Martin, 1998, p. 22)と指摘している。マーティンは、ジェンダーを横断するのではなく、むしろ異性愛者としてパスする形で現れるフェムの位置は、ストレートな役割の模倣 imitation とレズビアン固有性という対立を最もうまく置換すると主張する。同様に清水晶子は、「期待を裏切る：フェムとその不可視の〈アイデンティティ〉について」において、役割演技における「過剰性」によってフェムを積極的な主体として理論化したケースの議論は、マーティンが批判した「女らしさ/女性性から距離をおくことによって『積極的な』フェミニスト主体が可能になる」という前提に拠っていると指摘しながら(清水, 2003, p. 57)、フェムの政治的可能性は女らしさの規範からの「距離」や「過剰」にではなく、むしろフェムにおけるジェンダー同一化のストレート性と、性的対象選択のクィア性という「つじつまのあわなさ」(清水, 2003, p. 61)に存在すると説明している。

つまり、マーティンや清水の議論における「不可視のフェム」とは、「ジェンダー同一化のストレート性」によってその「クィアな性的対象選択」が不可視化されるという意味であり、その女らしさ/女性性という「ストレートな役割の模倣」を通じたジェンダー同一化は可視にとどまる一方で、視覚的にストレート女性との「区別」はつかないことによって女性への欲望が不可視なものになるという意味での「不可視性」である。しかし、フェムが不可視であるのは、セクシュアリティにおいてだけだろうか。プロッサーが指摘したように、「ストレートな」ジェンダーは自然化されることによって、その構築性/パフォーマンスティヴィティが見えなくされている(Prosser, 1998, p.30-31)としたら、その裏返しとして、フェムの、特にハイフェムの語りに見られるような必ずしも「ストレート」とは限らないジェンダー同一化の欲望は、「ストレート」としてしか見られないことによって、不可視なものとしてされているのではないだろうか。

実際に、アンバー・ホリボーやリア・リリス・A・サマラスンハらは、「クィアな」ジェンダー同一化のあり方として見なされるようなブッチ・レズビアンやドラッグクィーンのそれと同様に、自らのハイフェム・アイデンティティもまた構築されているものであり、生物学的なジェンダー(いわゆるセックス)に対してジェンダー横断的な形ではないにしろ、フェムもまた「異なるジェンダーを生きることを選んでいる」ということが多くの場合に認知されないことにいらだちを覚えているようである(Hollibaugh & Samarasinha, 2000, p. 249)。しかも、

ホリボーの語りに特徴的であるのは、ケースがフェムの女性性の過剰を、ブッチとの関係性において示したこと、即ち、ブッチに欲望されるような、ブッチに対して魅力的であるような女性性の構築という意味での過剰性や、ブッチ/フェムという関係性自体のパロディ性をフェムの攪乱性として示したのに対して、ホリボーがはっきりと、「ハイフェムが意味するものとは、ブッチ/フェムといった関係の外側 [dots added] における、トランスジェンダー的な状況です [Hollibaugh]」(Hollibaugh & Samarasinha, 2000, p. 249)、また、「エロティックな関係性に関するものではない、つまりブッチとの関係性におけるものではない [dots added]、ハイフェム性のトランスジェンダー的側面というものがある [Hollibaugh]」(Hollibaugh & Samarasinha, 2000, p. 249)と語っているのは、看過できない。このような、「自然なジェンダー」への違和感を、あるいは、「本物の/自然な女性とみなされること」への違和感を、どのように考えることができるだろうか。

3「本物の女性」への「違和感」と視覚性

3.1「身体の他性」という問題

ホリボーが「ハイフェムのトランスジェンダー的側面」と表現しているように、このような「違和感」を考える際に、トランスジェンダー/トランスセクシュアルの理論や語りは示唆的である。プロッサーは、「トランスセクシュアルは必ずしも異なったジェンダーに見える必要はなく、むしろ生まれたときに割り当てられたセックスから異なって感じるということによって、定義される」(Prosser, 1998, p. 43)と指摘し、「トランスセクシュアルの語りとは、肉体的な内部性(内面的な身体感覚)というカテゴリーと、そのような身体感覚の(外面的な表面としての)見えるものからの独自性の承認に頼っている」(Prosser, 1998, p. 43)としている。本論文では、ホリボーが語る「フェムのトランスジェンダー的側面」を、バトラーやハルバーシュタムの議論におけるジェンダー交錯への方向ではなく、むしろプロッサーの定義するような「かならずしも可視的ではない違和感(異なって感じること)」として読みとっていきたい。スウェーデンの著名なMtFトランスジェンダーでフェムの活動家であるアンディ・キャンディもまた、フェムとトランスの強いつながりを指摘し、「フェムの女性性とは不協和音のようなもので、明らかにストレートなものからは区別されるものだから、自分のアイデンティティのうち、どこまでがトランスでどこからがフェムかという区別はつけられない」と語っている(Candy, 2008, p. 88)。

プロッサー的な意味における「トランスセクシュアル」とホリボーの語りにおける「フェム」が、身体とジェンダーの連続性に関する「違和感」においてある程度の親和性を持つのだとすれば、プロッサーのバトラーによるジェンダーのパフォーマンスティヴィティ理論への批判はハイ

フェムのジェンダー・パフォーマンスを考える際にも重要なものとなる。清水は「彼女〔バトラー〕は主体によってうまく自然化あるいは『字義通り化』として経験されなかった身体について考えられていない」という意味においてプロッサーのバトラー批判は妥当であるとして、幻想的に字義通り化されながらも、主体にではなく他者に属しているものとして経験されるような「身体の他性 the alterity of the body」をバトラーの理論では十分に説明できないと指摘している (Shimizu, 2008, pp. 14-15)。清水の指摘するように、バトラーの、そしてバトラーを引き継いだ形で展開されてきたジェンダー・パフォーマンスの理論では、「違和感」を感じるような主体が、一しかも、それをジェンダー交錯的な形で可視化させるような形式をとらなかつた場合に、不可視のままにとどまるような「違和感」をもつようなものとして確かに存在する〈わたし〉が一、十分に説明できないとしたら、ハイフェムのジェンダー同一化への欲望を、〈わたし〉の生存可能性が賭けられたジェンダー・パフォーマンスとして、改めて検証する必要があるのではないだろうか。

フェムのナラティブにおいてしばしば登場する、自分自身が「〈自然な〉女性ではない」(Hollibaugh, 2000, p. 147) ような経験や、「生まれつきの女の子 Girl-By-Nature という宿命」を拒絶し (Duggan & McHugh, 2002, p. 166)、「たとえ生まれたときに割り当てられたジェンダーから〈もう一方の〉ジェンダーへと横断していないとしても、それでも私たちは異なったジェンダーを生きることを選んでいるのだ [Samarasinha]」(Hollibaugh & Samarasinha, 2000, p. 249) という感覚を、どのように説明できるだろうか。清水は、幻想的に字義通り化されながらも、それが「自然なもの」として経験されなかったような「身体の他性」とは、トランスセクシュアルの経験や拒食症あるいは過食症のそれに見いだせるように、「主体の身体的、精神的サバイバルにとってとりわけ重要な問題である」(Shimizu, 2008, pp. 11-12) という重要な指摘を行っている。既に見たように、(ハイ)フェムの〈自然な〉女性への違和感とは、それがジェンダー交錯的な形をとらないにも関わらず、トランスセクシュアルの身体によって経験される「かならずしも可視的ではない違和感」と類似したものであり、またそのような違和感を感じた〈わたし〉は、身体とジェンダー・パフォーマンスに視覚的な首尾一貫性を読み込まれることによって不可視化されているために、まさに清水の問題とする「主体ではなくむしろ他者に属しているものとして知覚される」ような「身体の他性」の経験として捉えることが可能だろう。ハイフェムの「〈自然な〉女性への違和感」とは、それが自らのコントロールを超えた「身体の他性」として経験されるものであるため、それは「違和感をもった〈わたし〉」の生存なしには成立し得ないような (ハイ)フェム主体の「身体的、精神的サバイバル」の問題となるのである。¹

3.2 ジェンダーの不可視性：トランスセクシュアルとハイフェムの問題

前節でも述べたように、ジェンダー交錯的なジェンダー同一化を伴わない、ハイフェムの「トランスジェンダー的側面」とは、「必ずしも異なったジェンダーに〈見える〉必要はなく、むしろ生まれたときに割り当てられたセックスから異なって〈感じる〉」(Prosser, 1998, p. 43) というプロッサーによるトランスセクシュアルの定義における、「必ずしも可視的ではないような違和感」という部分において非常に近いものとなる。ハイフェムのある種「トランスジェンダー的」なジェンダー同一化が、それが視覚的な身体との一貫性を読み込まれたときに、それは「ストレートなもの」とみなされ、「〈自然な〉女性」へ違和感を感じる〈わたし〉は常に可視の領域に留まることができるとは限らないからである。しかしながら、プロッサーの主張するトランスセクシュアル的経験の固有性において、その違和感が「必ずしも可視的ではない」ことから、視覚ではなく「触覚的な感覚 feeling」の優位性、あるいは身体の「内部性 interiority」や「現実 reality」の存在論へと向かうのに対し、ハイフェムの感じる「違和感」はそれがジェンダー交錯的な現れ方をしないために不可視であるにも関わらず、むしろ、不可視であるからこそ、視覚とは切り離すことのできないものとして現れてくる。「〈自然な〉女性」への違和感とは、「〈自然な〉女性として見られることへの違和感」であると同時に、自らの(ハイ)フェム性を確立／確認する手段もまた、「ただのジェンダーの領有でも、ガールになることでもなく、自分自身がガールになるのを見ること [Hollibaugh]」(Hollibaugh & Samarasinha, p. 245) という言明に現れているようにしばしば非常に視覚的な感覚を伴うものである。

フェムの「違和感」、あるいは「異なるジェンダーを生きる自分」を演じるフェムのジェンダー・パフォーマンスは、異性愛主義的な社会から不可視であるだけでなく、レズビアン・コミュニティの内部においてもしばしば不可視であったり、あるいは批判の対象となってきた。フェム性が不可視であること、つまり異性愛主義社会の制度の『内側の』異性愛女性として「パスできる／してしまう」フェムのジェンダー同一化は、確かにマーティンや清水が指摘するように異性愛／同性愛という二項対立を脱自然化し、「制度を内側から攪乱的に配置しなおす試みのラディカルな可能性」(清水, 2003, p. 58)を持つ。しかしその一方で「異性愛者である」ことが前提とされるような強制的異性愛社会において不可視の存在であることが、レズビアン・コミュニティからの中傷や誤認と重なったとき、フェム・レズビアンは著しい失望と疎外感を感じるということとなるという (Samuels, 2003, p. 246)。そのような状況でフェムはつねに自らのアイデンティティが疑問視され続けるという、非常に困難な状況に立たされることになる (Samuels, 2003, p. 246)。「ストレートな」コミュニティにおける生きづらさに加えて、レズビアン・コミュニティに対してカミングアウトすること、あるいは自らが「ストレートで

はないことを証明すること」(Craig, 2009, p. 123-124)がフェムにとって困難であるような状況において、フェムのアイデンティティは「どのように見られるか」にかかっているとする議論は少なくない。その一例として、自らのフェムとしてのアイデンティティを「どのように感じるか、あるいは振る舞うかということよりも、むしろどのように自分が見られているか [dots added]」にあるとするクレイグの言明においても明確に現れている (Craig, 2009, p. 123)。

4 「遠隔的同一化 Identity-at-a-Distance」

このように難しい状況におかれたフェムの「違和感」と「トランス的状况」を、カジャ・シルヴァマンの「遠隔的同一化 Identity-at-a-Distance」という概念から考察することを試みたい。プロッサーや清水が指摘したような首尾一貫したものとして、自分のものとして知覚されないような身体を経験を、フェムのジェンダー同一化の不可視性に類似したものとして考える際に、シルヴァマンが「遠隔的同一化」として理論化した、「自分ではないもの」に対して「異発的同一化 heteropathic identification」² をすることは、文化の中で反-理想化されたイメージに自らを同一化するように強要された主体が、自らが反-理想化されたイメージと同一のものとなってしまうよう抵抗することを可能にするという点において、非常に示唆的な論考である (Silverman, 1996)。

カジャ・シルヴァマンが提示する「遠隔的同一化」という概念は、精神分析家のアンリ・ワロンが1934年の著作『児童における性格の起源』で示した、幼児が鏡に写った自分の身体の像を自分自身としてではなく、むしろ自分自身とは分離したものとして知覚すると同時に、その鏡像はどういうわけか、そのイメージとの関係において子供が自己の立場を見定めることを可能にするものとして経験される、という鏡像段階理論からその着想を得ている。シルヴァマンによれば、ワロンの鏡像段階理論においては、視覚的イマーゴ、あるいは「外部知覚的自我 exteroceptive ego」と、「自己受容的自我 proprioceptive ego」はそもそも分離しているものであり、自己受容的自我との関係において、鏡像は『外部』として知覚されるものである (Silverman, 1996, p. 15-16)。「自己受容性 proprioceptivity」とは、視覚的イマーゴと同様に、身体自我の形成の中核をなす概念であり、特にシルヴァマンは、これを身体感覚 the body's sensation と深く関係しているものと位置づけた上で、「視覚的ではない身体形式の図式」を含むものとして捉えている (Silverman, 1996, p. 16)。つまり、シルヴァマンが「遠隔的同一化」と名付けた、視覚的イマーゴである鏡像、すなわち外部知覚的自我が、自己受容的自我にとって自分自身というよりは「何か他のもの」として知覚されるような経験は、「同一化/性 identity」という言葉が字義通り意味する「同じものになる状態」に反して、「遠隔的同一化とは、

まさにその反対の状態—『他者/他のもの other』になるという状態あるいは特質を必然的に伴う」(Silverman, 1996, p. 15)ものとなる。

シルヴァマンが問題にしているのは、ラカンの鏡像段階において前提とされている「自己同一的身体の原理」においては、ごく限られた主体のみがそのような首尾一貫した身体自我にアクセスを許される一方で、他の主体は反-理想化されたイメージを押し付けられ、それは「バラバラな身体 Body in Bits and Pieces」という、悲劇的な「主体化の失敗」として経験されてしまうということである。シルヴァマンは、ワロンの鏡像段階理論との比較を通して、ラカンの鏡像段階理論における幼児の「歓喜に満ちた」誤認が、視覚的イマーゴ（外部知覚的自我）と自己受容的自我（感覚自我）がスムーズに統合され、主体にとって「全体 altogether」の感覚として（一時的とはいえ）経験されるという前提に依存していると指摘する (Silverman, 1996, p. 17)。しかしこのような統合によってもたらされる歓喜に満ちた「全体性 wholeness」や「統一性 unity」という経験は、それがまなざし the gaze に認められるだけでなく、その視覚的イマーゴが好ましいものとして、つまり理想的な性質を帯びたものとして受け取られるときのみ可能になる、とシルヴァマンは主張する (Silverman, 1996, p. 20)。この「全体性」や「統一性」への強い願望に基づく「自己同一な身体原理」は、「一貫性への熱望」として「規範的な白人男性の身体自我」を定義づけるものとしてシルヴァマンの中で位置づけられる (Silverman, 1996, p. 31)。

一貫した身体自我の概念が文化的に価値づけられることによって、身体的多数性は悲劇的で暴力的な経験として知覚されることとなる。シルヴァマンは『精神分析の四基本概念』（セミナー XI）において「眼差し the gaze」と区別してラカンが用いた、「スクリーン the screen」という概念を「文化が表象する、社会的アイデンティティが刻み込まれる様々な〈差異〉の形式」(Silverman, 1996, p. 19)として捉える。その上でシルヴァマンは、スクリーンにおいて表象される様々な「差異」の形式とは、全ての理想化された属性—「白人性」「男性性」「異性愛」—がその反対の意味をも含んでいること、つまりそれ自身が「理想というよりは否定的なものへの想像的な配列/配置に依存している」ことを指摘する (Silverman, 1996, p. 19)。まなざしが主体を「焼き付ける photograph」イメージが文化的に理想的な地位を与えられることによって「自己同一性」を経験する主体が存在する一方で、文化的なまなざしによって非-理想化されたイメージとの同一化を強いられる場合、それは主体にとって「歓喜に満ちた」同一化の経験ではなくむしろそのイメージを拒絶し、それとの距離を確保しなくてはならないようなものとして経験されるのである (Silverman, 1996, p. 20)。

一貫した身体自我の概念が文化的に価値づけられることによって維持される、「自己同一な身体原理」においては、身体的多数性は悲劇的で暴力的な経験とならざるを得ない。シル

ヴァマンの関心は、主体が自らを非-理想化されたイメージへ同一化することの身体的困難から、文化的に非-理想化された視覚的イマージ（外部知覚的自我）と自己受容的自我の間に距離を確保することを可能にするような身体的多数性の可能性へと向かう。一貫した身体自我に価値を置くラカンの理論において身体的多数性が悲劇的な経験とされるのに対して、ワロンは、そもそも自我の一貫性は常に危ういものであり、身体自我を構成する諸要素の分離を強調しているとシルヴァマンは指摘する (Silverman, 1996, p. 21)。シルヴァマンは、自己受容的自我は常に最初から視覚的イメージと分離したものであるという、アンリ・ワロンや、ポール・シルダー、マックス・シェラーらの展開する身体自我論に着目する。

ワロンの鏡像段階理論においては、統一的な身体自我とはそのようなバラバラのパーツを縫い合わせるという困難な作業の結果としてのみ存在するようになるものであり、幼児が鏡像を自らの「外部」として経験する「遠隔的同一化」は、ラカンの理論のようにイメージと感覚的自我の不整合が異常や病理的な結果を生まない。シルダーは、視覚的自我と感覚的自我の非統合を悲劇ではなくむしろ自我の変化への前提条件として有益なものとして捉えており (Schilder, 1950/1987, p.88-91)、またシェラーの議論において「自己自身の自我と他者の個体的自我との真の一体感」(Scheler, 1923/1977, p. 50)を意味する「異発的同一化」をワロンの鏡像段階理論を通して読むことで、シルヴァマンは非-理想化されたイメージへの同一化を強制された主体が、「身体自我の異質性が生きる可能性」(Silverman, 1996, p. 21)を「遠隔的同一化」の概念に見出す。

「遠隔的同一化 Identity-at-a-Distance」の概念化を通して、シルヴァマンはラカンの鏡像段階理論が前提とするような「自己同一的な身体の真理」、あるいは「首尾一貫性の熱望」に対して、反-理想化されたイメージへの同一化を強えられる主体が抵抗する可能性を示した。その一方でシルヴァマンは、身体自我の異質性あるいはその非統合が悲劇的で暴力的な経験となることに関しても指摘している。シルヴァマンは、ファノンが『黒い皮膚・白い仮面』において説明する、疑問の余地もなく白人性が特権化された社会において黒人であることの意味を、ラカンの鏡像段階理論でもワロンの鏡像段階理論でもないものとして概念化する必要があると指摘している。それは、鏡の中に「歓喜に満ちた誤認」を可能とされたのではなく、むしろ「非常に不愉快な同一化を引き起こす」(Silverman, 1996, p. 27)であると同時に、理想化された白人性への異発的同一化もまた、「自己が決してなることのできない」ような、「到達不可能な身体規範」(Silverman, 1996, p. 29)であるからだ。シルヴァマンは、ファノンの描く黒人男性の身体自我とはむしろ、白人男性の視線 the look が特権化されたカメラ/眼差しとして機能する中で、否定的な意味を付与された「黒人性」のスクリーンに「焼き付けられる

photographed」ことによって、ラカンの「バラバラな身体 Body in Bits and Pieces」という悲劇的で暴力的なものとして経験されるという。

フランス社会がファノンに突きつける鏡とは「徹底的に非-理想化されたもの」(Silverman, 1996, p. 28)であり、それはまた「黒人性」のスクリーンと同義である。反-理想的なイメージを文化的に付与された黒人男性の身体自我が直面する苦闘を、シルヴァマンは以下のように述べている。

ここで起きている闘いとは、伝統的な同一化の説明のように、視覚的イマージと自己受容的身体の間の距離を近づけることではない。そうではなくて、距離を維持／主張 maintain することである——まさに一貫した自我と同義である、自己同一性の性質としてみなされないよう、「黒人性」のスクリーンから感覚的自我を安全に遠ざけておくことである。(Silverman, 1996, p. 28)

ここで重要になるのは、視覚的イマージとしての「黒人性」のスクリーンが自己受容的身体と等価にならないよう、その距離を縮めるのではなく、むしろ維持／主張するような闘いを迫られるのである。しかしこのように、ファノンが自己受容的身体のイマージへの吸収を妨げようとする闘いが、まさに彼を「バラバラな身体」の暴力的な経験へと導く様子を、シルヴァマンはファノンの以下の文章から読み取る。

身体図式は四方からの攻撃を受け崩壊し、人種の皮膚的図式がとって代った。汽車の中ではもはや私の身体の第三人称での認識ではなく、三重人格としての認識を行わなければならなかった。... 私は三人分存在していた。

...

私は自分の体の上に客観的なまなざしをそそいだ。私の肌の黒さを、私の人種的な特徴を発見した。——そして、人喰い、精神遅滞、物神崇拜、人種の欠陥、奴隷商人といった言葉が耳をつんざいた。

.....

私は、私の現存在から遠くに、きわめて遠くに飛び出し、自己をもの object となした。それは私にとって、何であったというのか、切り取りでなくして、引っこ抜きでなくして、全身にわたって黒い血を凝固させる出血でなくして。(Fanon, 1952/1998, p. 132)

ファノンの描く、「自分の身体が三人分ある」「自分自身を対象／ものにする」経験とは、「耐えられないイマーゴへの〔強制的な〕同一化」であり、「切断」や「切除」、あるいは「出血」といった表現によってテキストに現れる「暴力的な切断」とは、まさにラカンの示した「バラバラな身体の幻想」であるとシルヴァマンはいう (Silverman, 1996, p. 29)。しかし、「自分自身を対象にすること」は、「否定的な意味を文化的に付与されたイメージ」に吸収されてしまうことのないよう、主体のサバイバルを可能にするような「遠隔的同一化」という概念の政治的有用性として考えることもできるのではないだろうか。

5 フェムの「遠隔的同一化」と変容可能性としての女性性／フェム性

本論文が問題とする、(ハイ)フェムの「(自然な)女性」への違和感が、つまり首尾一貫した「自然」ではないようなものとして知覚される経験を考察する際に、シルヴァマンの議論は非常に示唆的である。特に「視覚的イマーゴと自己受容的身体の距離を縮めることではなく、むしろその距離を維持／主張することである」というシルヴァマンの指摘は、クィアなジェンダー同一化の欲望が自らのフェム性の重要な部分を占めるハイフェムにとって、非常に重要な概念となる。

既に述べたように、トランスセクシュアル主体の「違和感」とは身体そのものに対する違和感であり、そこで生じている「身体自我の異質性」とは、トランスセクシュアル主体の生存を脅かすものであるため、視覚的外見としての身体（視覚的イマーゴ、あるいは外部知覚的自我）を再構成し、視覚とは独立した部分で働く感覚 feeling や内部性 interiority（すなわち自己受容的自我）と一貫させなければいけない。

身体再構成に重点を置くトランスセクシュアルの軌道が明らかにするのは、トランスセクシュアルの文脈において問題となるのが、身体自我が物質的な身体部位へ接合や適合するのを感じる [dots added] 能力にあるということである。要するに、それが非-幻想的な状態であるということの根底にあるのは、セックスが変えなくては いけない何かとして知覚される [dots added] ということである。(Prosser, 1998, p. 44)

身体そのものへの違和感が問題となるトランスセクシュアルの文脈においては、外部知覚的自我と自己受容的自我を一貫させ、違和感は解消しなくてはならないものであるのに対して、自らを「自然」で「ストレート」な女性と見なすようなジェンダー規範への違和、つまり「スクリーン」に対して違和を感じるハイフェム主体にとって、その「違和感」は解消されるべきものであるというよりは、むしろ自らをハイフェム性として構成する要素の一つであると考え

られる。ハイフェム性において重要な点とは、ホリボーの「本物の自分になるのではなく、ガールに見えないガールになること」という語りにおいて顕著に現れているように、いかに「違和感」を維持し続け、また日々のジェンダー・パフォーマンスにおいてそれを主張していくかということにあるのだ。そのような意味において、シルヴァマンがその政治的有用性を主張する「遠隔的同一化」は、自分ではないものに同一化するという「身体自我の異質性」を、「主体化の失敗」ではないかたちにおいて思考することを可能にするのである。

同様に、「自分自身を対象にする」、あるいは「自分自身をまなざす自分」という経験は、ファノンのナラティブにおいては暴力的・悲劇的なものとして現れることをシルヴァマンは指摘したが、同様の経験がフェムのナラティブにもみられるだけでなく、それがフェムのナラティブにおいては悲劇ではなく、むしろフェム性を成立させる非常に重要な部分の一部として語られている。既に3章でも触れたように、自らをハイフェムと認識するアンバー・ホリボーは、自らの女性性に関して以下のように語っている。

私の女性性はアイロニーをめぐるものです。それはジェンダーの領有であるだけでなく、ジェンダーの構築性に関する申し立てなのです。それはガールになることではなく、自分自身がガールになるのを見ること [dots added] なのです。[Hollibaugh] (Hollibaugh & Samarasingha, 2000, p. 245)

ホリボーにとって、「対象（ガール）としての自分をまなざす」ことは、「対象（ガール）になること」とは明確に区別されているだけでなく、むしろ自己をイメージと同一化すること（ガールになること）を回避し、自らの女性性をアイロニーとして提示するための戦略であることがわかる。「自然に」女性性へと同一化するのではなく、「ガール」のイメージを対象化することによって「遠隔的同一化」を行い、フェムのトランス的状況を皮肉的な女性性として提示するのである。

また、リサ・ダガンとキャサリン・マッキューは、フェム性に関する著名なテキスト“A Fem(me)inist Manifesto”において、女性／フェム fem(me) を以下のように説明している。

フェムは装われ、また見せかけであり、主体 subject が対象／もの object になることで作られるフェティッシュな構築物であり、フェティッシュになることであり、パフォーマンスの感覚を常に持ち続け、それを常に楽しんでいる一方で、（ここに彼女の闘いがあるのだが）その結果にうんざりすることもある。女性／フェムとは、パフォーマンスティヴィティであり、不誠実さであり、偽物であり、前戯をばかにする――

賭けであり、大胆な挑戦であり、彼女に喜びを与えてくれる人を気づかせるのである。
(Duggan & McHugh, 2002, p. 165)

この文章において明確に示されているように、対象／客体になるということは、ハリボートのナラティブと同様、フェムネスを構成する一部である。そのパフォーマンスはしばしば、異性愛主義社会において身体との一貫性を読み込まれることによって、規範的な（そして「欠如」としての）女性というスクリーンへと暴力的に取り込まれてしまい、それは精神的・身体的生存を脅かす。しかしそのような状況で、自らを対象／客体とすることは、同時に「ガールになる自分を見る自分」を可能にするため、清水が「視覚的イマゴを対象／客体とすることは、自己がそれに対するコントロールをある程度取り戻し、視覚の領野にある意味で現れるための、第一歩となるかもしれない」(Shimizu, 2008, p. 38)と指摘しているように、ジェンダー交錯的ではない形でスクリーンとの距離を確保し、〈自然な〉女性への違和感をアイロニーとして維持／主張する可能性を持っているのである。

このように、遠隔的同一化を通じて「〈自然な〉女性」への「違和感」を、あるいは「身体自我の異質性」を維持／主張するハイフェムにとって、自らを歴史的に意味付けられた伝統的・規範的な女性というスクリーンとの間の「距離」は不可欠なものであると同時に、その「距離」が「女性性や女性の身体から離れるべきものとする」として、マーティンの批判を反復する形で確保されるべきではないだろう。「アイロニーとしての女性性」というハイフェムのジェンダー・パフォーマンスはしばしばパロディ的で、ケースの主張するような「過剰な女性性」の演技と見なされうる場合もある。キャロル＝アン・タイラーが批判する、模倣 *mimicry* やドラッグにおける過剰性の演技とは、「自然な女性性」を前提として、「階級的、あるいは人種的他者への実際には非-同一化であるような同一化」を通して、自らを差異化する「距離のフェティッシュ化」であり (Tyler, 2003, p. 104-105)、その意図に反して白人中産階級の女性性を「女性性の本質」として書き込んでいくだけでなく、棄却するために呼び出される「否認されるべき他者」を構成、収奪するものである (Tyler, 2003, p. 105)。

ここで、シルヴァマンの「スクリーン」という概念へと立ち戻りたい。シルヴァマンは、まなざし *the gaze* は非歴史的で、常に既に主体のコントロールを超えているとしながらも、スクリーンを文化によって表象される、社会的アイデンティティが刻み込まれる様々な〈差異〉の形式として捉えている (Silverman, 1996, p. 19)。「社会的・歴史的差異が視覚の領野へ入り込む場」(Silverman, 1996, p. 134) というシルヴァマンによるスクリーンの再定義を受け入れるならば、スクリーンを社会的・文化的差異の介入する場として考えることで、同時にそれを非歴史的で普遍的なものではなく、変容可能なものとして思考することが可能となるはずであ

る。フェムにとって「鏡」とは、視覚的イマゴと〈わたし〉との距離を確保するものであると同時に、スクリーン自体を変容させるための重要な「道具」³でもある。

鏡は彼女〔女性／フェム〕を溺れさせるプールではない。それらは彼女の根本的なアイロニーの道具、あるいはメタファーなのだ。彼女のパースペクティブは常に部分的に超感覚的である——それは悲劇的ではない [dots added] ような、バージャーの「見られている自分自身を見る女性 “women watch themselves being watched”」、あるいはマルヴィの「見られること “to-be-looked-at-ness”」なのだ。(Duggan & McHugh, 2002, p. 165-166)

ハイフェムのジェンダー・パフォーマンスは、女性性や女性の身体からいかに離れるかを問題にするのではなく、むしろ女性性を指向し、執着し、そのスクリーン自体を変容させることによって、「女性性を異性愛主義的な歴史から解放」(Dahl, 2008, p. 20)する。重要なのは、女性性からの距離を確保することではなく、それらを異性愛主義的な男性のまなざしの対象／「欠如」としてみなすような、歴史的・文化的な意味付けから離れること、あるいはそれに抵抗していくことにある。それは女性性を固定させ、そこから「ずれる」ことで「違和感」を可視化させるのではなく、「自分の女性性をすっかり、そして固く信じているドラッグクイーンこそが、私に女性性を理解させてくれる [Hollibaugh]」(Hollibaugh & Samarasinha, 2000, p. 245) というハリボートの言明からもわかるように、そのパフォーマンスは女性性からの「ずれ」を演じるものではなく、「女性性それ自体」である／の変容を意図するものであるのだ。ハイフェムの「違和感」と、それを維持／主張するジェンダー・パフォーマンスとは、まさにシルヴァマンがポール・シルダーを用いて指摘したように、反復、分裂、変形といったその構築の過程において、「身体自我が非統一性へと向かうことは、悲劇ではなくむしろ変化への前提条件」である (Silverman, 1996, p. 21)。それはジェンダー交錯的な同一化を伴わないが、いやそれゆえに、トランスジェンダー主体とは異なった形で異性愛主義的なジェンダー規範の中で、「違和感」を感じる〈わたし〉のサバイバルを可能にするだけでなく、規範的な女性性のスクリーンそれ自体を変容させていく可能性を切り拓くものであるのだ。

References

- Butler, Judith. (1999). 『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子, Trans.). 東京: 青土社. = (Original work published 1990). *Gender trouble: feminism and the subversion of identity*. New York, NY: Routledge.
- Butler, Judith. (1991). Imitation and gender insubordination. In D. Fuss (Ed.), *Inside/out: lesbian theories, gay theories* (pp. 13-31). New York and London: Routledge.
- Butler, Judith. (1993). Critically Queer. In *Bodies that matter* (pp. 223-242). New York, NY: Routledge.
- Butler, Judith. (2004). *Undoing gender*. New York and London: Routledge.
- Candy, Andy. (2008). The face of swedish transfeminism. In D. L. Volcano & U. Dahl (Eds.), *Femmes of power: exploding queer femininities* (pp. 50-55). London: Profile Books Ltd.
- Case, Sue-Ellen. (2009). Toward a butch-femme aesthetic. In *Feminist and queer performance: critical strategies* (pp. 31-48). New York, NY: Palgrave Macmillan. (Original work published 1989)
- Craig, Traci. (2009). Femme(In)visible or gender-blind?. In J. C. Burke (Ed.), *Visible: a femmethology, volume one* (pp. 123-127). Michigan: Homofactus Press L.L.C.
- Dahl, Ulrika. (2008). Introduction. In D. L. Volcano & U. Dahl (Eds.), *Femmes of power: exploding queer femininities* (pp. 50-55). London: Profile Books Ltd.
- Fanon, Frantz. (1998). 『黒い皮膚・白い仮面』(海老坂武 & 加藤晴久, Trans.). 東京: みすず書房. = (Original work published 1952). *Peau noire, masques blancs*. Paris: Ed. du Seuil.
- Duggan, Lisa., & Kathleen McHugh. A fem(me)inist manifesto. In C. B. Rose and A. Camilleri (Eds.), *Brazen femme: queering femininity* (pp. 165-170). Vancouver: Arsenal Pulp Press.
- Halberstam, Judith. (1998). Drag kings: masculinity and performance. In *Female masculinity*. Durham and London: Duke University Press.
- Hollibaugh, Amber L. (2000). *My dangerous desires: a queer girl dreaming her way home*. Durham and London: Duke University Press.
- Martin, Biddy. (1998). Sexualities without genders and other queer utopias. In M. Merck, N. Segal & E. Wright (Ed.), *Coming out of feminism?* (pp. 11-35). Oxford: Blackwell.
- Prosser, Jay. (1998). "Judith butler: queer feminism, transgender, and the transubstantiation of sex" . In *Second skins: the body narratives of transsexuality*. New York, NY: Columbia University Press.
- Samarasinha, Leah Lilith Albrecht. (2000). Gender warriors [Interview with Amber L Hollibaugh]. In *My dangerous desires: a queer girl dreaming her way home* (pp. 239-252). Durham and London: Duke University Press.
- Samuels, Ellen. (2003). My body, my closet: invisible disability and the limits of coming-out discourse. *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies*, 9(1-2), 233-255.
- Scheler, Max. (1977). 『シェーラー著作集 8 : 同情の本質と諸形式』(青木茂 & 小林茂, Trans.). 東京: 白水社. = (Original work published 1923). *Wesen und formen der sympathie*. Frankfurt: Schulte-Bulmke.
- Schilder, Paul. (1987). 『身体の心理学—身体のイメージとその現象—』(秋本辰雄 & 秋山俊夫, Trans.). 東京: 星和書店. = (Original work published 1950). *The Image and Appearance of the Human Body*. New York: International Universities Press.
- 清水晶子. (2003). 「期待を裏切る—フェムとその不可視の『アイデンティティ』について—」. 『女性学』, 11, 52-68.
- 清水晶子. (2006). 「キリンのサバイバルのために—ジュディス・バトラーとアイデンティティポリティクス再考」. 『現代思想』, 34(12), 171-187.
- Shimizu, Akiko. (2008). *Lying bodies: survival and subversion in the field of vision*. New York, NY: Peter Lang Publishing.
- Silverman, Kaja. (1996). *The threshold of the visible world*. New York and London: Routledge.
- Tyler, Carole-Anne. (2003). Boys will be girls: drag and transvestic fetishism" . In *Female impersonation*. New York and London: Routledge.

Author Note

本稿は、2010年1月一橋大学大学院審査修士学位論文「ガールに見えないガール—〈女性〉による〈女性性〉の遂行／パフォーマンス」の一部を再構成し、加筆訂正したものである。

Footnotes

- ¹ ホリボーは「実際に、私は一度だけ自殺をしようとしたことがあるのだけれど、それは自分がレズビアンであることと折り合いを付けるのではなく、フェムであることと向き合おうとしたときのことだったの。」と語っている (Hollibaugh, p. 147)。
- ² heteropathic identification に対応する「異発的同一化」という訳は、青木&小林の日本語訳書 (1977) における「異発性一体感」という訳語を参照した。
- ³ フェムの理論家であるウルリカ・ダールもまた、フェムはアイデンティティの単なる可視的な宣言以上のものであり、それは実体というよりは楽屋の鏡にくっきりと反射する像のようなものであると指摘しており (Dahl, p.23)、またダールと視覚芸術家デル・ヴォルケーノの共著である *femmes of POWER: Exploring Queer Femininities* (2008) に掲載されている、ヴォルケーノの撮影によるフェムの写真作品においても、鏡をモチーフとしたものが多く見られる。

"Trouble" Revisited: Female Female Impersonation and its Subversion**Makiko ISERI**

This paper explores the potential of female female impersonation by examining the nature of gender performativity as not necessarily being interlocked with gender crossing. This issue is studied in light of the desire for gender identification by femme lesbians, particularly high femmes.

Since the 1990s, there has been increasing attention on the subversive potential of gender crossing subject in both queer theory and post-structuralist feminist theory. However, femme lesbians have not only tended to be overlooked in this regard, but rendered "invisible" due to the fact that they "look straight."

This paper examines how high femmes do not try to resolve this conflict but in fact maintain it, while still holding onto their "fem(me)ininity" in their strong desire for gender identification. The issue is explored through a study of high femme narratives and considered in light of Kaja Silverman's concept of "identity-at-a-distance."

Keywords:

female female impersonation, high femme, gender performance, Identity-at-a-Distance, fem(me)ininity